
東方古今録

とんそく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方古今録

【Nコード】

N1731BA

【作者名】

とんそく

【あらすじ】

もう少し話数が出たら書きます、一応バトル成分多目で書きます

プロローグ（前書き）

この小説は多分に作者の独自解釈や妄想、二次創作成分が含まれます。それらが嫌いな人は読まない事をお勧めします、それでもOKな方はどうぞ

ブログ

2011年3月7日 博麗神社

「……寒い」

そうばやいてしまっても無理はないだろう三月の入って一週間もつたっているのに未だに冬の妖怪が飛び回っているのだそれに――

「靈夢、貴方も食べない？」

スキマから上半身だけを出してかき氷取り出す紫に視線を向ける

「いらないわよ、それになんでこのくそ寒い中かき氷なんか食べなきゃならないのよ」

紫の手元を見ると山盛りのかき氷にスプーンをザクザクと突き刺し氷の山を崩している、赤いシロップがかかっているのでイチゴ味だろう

「暑い時に熱いカレーを食べる、寒い時に冷たいかき氷やアイスを食べる、似たような物じゃない？」

そんな事を言っているが、妖怪と人間の体の強さの違いを考えてほしい、私が今こんな物を食べたら明日、間違いなく風邪を引くだろう

う、それにその理屈はおかしい

「全然違うわよ……見てるだけでも寒いから早く片付けてよ」

「そうかしら？ でも良いでしょう、美味しいんだし……って、お客よ」

そう言いながらスキマから出て神社の境内に降り立ち、かき氷から神社の石段へ視線を移した、そこには龍宮の使いの妖怪、永江衣玖がいた

「こんにちは霊夢様、紫様お久しぶりです」

相変わらず丁寧な口調で挨拶をしてくる

「何か用かしら？」

紫が衣玖にスキマから取り出した新しいかき氷を渡しながら問う

「近い内にとても大きな地震が起こります、今回の地震はかなり大きくなりそうなので要石の埋めてある博麗神社にも一応連絡を…….
と思ったので」

紫からかき氷を受け取りながら衣玖が言った

「地震ねえ……」

また神社が壊れなければ良いが、また地震で神社が壊れてしまったら……. 考えたくも無い、それに自然災害だとやつあたり……. もとい異変解決が出来ないそれは困る

「はい、龍神様が地上の物達に伝えて来いと」

紫は思案顔で俯いた、何か深刻そうな顔だが、何か面倒ごとに巻き込まれるのは嫌なのであえて無視する

「霊夢、ちよつと用事が出来たわ、私はこれで失礼するわ」

いきなりそう言ったかと思うと紫が出て来たばかりのスキマの中へ消えて行った、式神の藍へ地震の事を伝えにいったか、それとも何か幻想郷の被害を最小限抑えるための根回しでもしに行ったのだろうか

「で、今回はあの不良天人は関係ないのよね？」

一旦紫の事はおいというて聞く、まああつたとしても夢想封印で消し炭にするだけだが

「その点については安心して下さい、地上に来る少し前、総領娘様はまだ何かたくらんでいた様なので、夜中部屋に忍び込んで寝ている間に亀甲縛りにして部屋に吊るしておきました（総領娘様は縛られている間中ずっとハアハア言っていたのは不気味でしたが）」

先程の紫の様にスプーンをかき氷にさくさくと刺しながら衣玖は言った

「それは……まあ、良いけど、そんなに大丈夫なの？」

それに亀甲縛りって、どんな趣味してるのよ……

「はい、非想の剣も天界の……あむ、む？ 美味しい……宝物庫の

中に放り込んで、あむ、シャリシャリ来ましたし、総領娘様の部屋周辺は……むぐ、シャリシャリ立ち入り禁止にしたので、シャリシヤリ」

衣玖が紫に貰ったかき氷を頬張りながら喋る、これから来るであろう地震に対し緊張感もへつたくれもない

「宝物庫ねえ……」

うちの神社の宝物庫もそろそろ掃除した方が良いかしら？ でも一人だと大変そうだし、魔理沙にでも手伝って……って、手伝い賃だつて中の物を全部持つて行きそうだし却下ね、どうしようかしら

「では、私は……あむ、シャリシャリ他の、シャリシャリ場所に、シャリシャリ伝えに行かなければ、シャリシャリならないので」

「分かったから食べ終わってから話さないよ」

「すみません、あと一応高い所にある物はあらかじめ降ろしておく事をお勧めします」

衣玖は最後にかき氷の容器を煽り飲み干し言った

「ええ、忠告ありがとう、あと今度から様付けは止めて貰える？ 慣れないから」

「分かりました霊夢さん、後これ紫様に渡しておいて下さい」

空になった透き通ったガラスのかき氷の容器を渡される

「分かった、渡しておくわ、また来る時はお賽銭もお願いな」

「善処します、では」

衣玖は羽衣をはためかせ境内から飛び去った

「行っ たわね……さてお茶でも飲もうかしら」

それにしても地震か、大きいと言っても私はあの時よりの地震より大きな揺れを経験した事はない、まああの時よりも大きな地震なんてそうそう起きないだろう、まあそんな大事にはならないだろうし

「ほっとけば何とかなるでしょ、さっ お茶お茶」

ブログ（後書き）

一度別のタイトルで書いていたましたが、一度全て削除してまた東方古今録で投稿しました、誤字脱字の指摘などお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1731ba/>

東方古今録

2012年1月4日12時47分発行